W-2-3

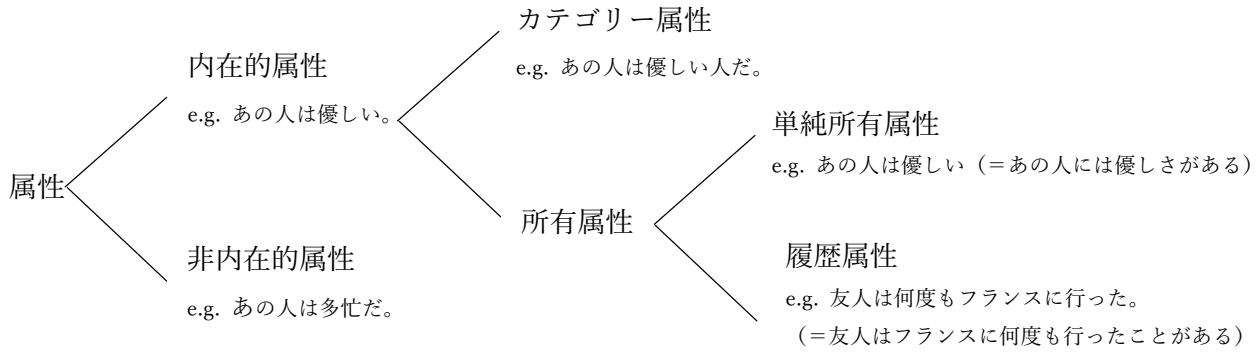
属性叙述におけるテンス・アスペクト体系

鈴木彩香（国立国語研究所プロジェクト PD フェロー）

1. はじめに

■ 本発表の背景

（1）属性叙述文のタイプ（益岡 1987, 2008）



（益岡 2008: 7 に例文を追加）

➢ これまでの研究においては、事象叙述と属性叙述の相違点に着目されることが多かった

- 影山（2009, 2012）：属性叙述と事象叙述は文構造が異なる

（2） a. 事象叙述述語の項構造：(Ev (x (y (z))))

b. 属性叙述〔ママ〕の項構造：

(x, y, z) または(Ev^ (x, y, z)) （^は抑制を表す） （影山 2009: 28）

- 工藤（1995, 2012）：時間的限定性により、テンス・アスペクトのあり方が異なる
  事象叙述文のテンス・アスペクトに対し、属性叙述文のテンス・アスペクトは周辺的に位置づけられる

（3） 時間的限定性

＜具体的＞――――――1 回性 【アスペクト対立有、テンス対立有】

｜ ポチが 吠える／吠えた／吠えている／吠えていた。

＜抽象的＞――――――反復性 【アスペクト対立中和、テンス対立有】

｜ ポチは毎朝 吠える（＝吠えている）／吠えた（＝吠えていた）。

＜一般的(超時)＞――― 特性 【アスペクト対立無、テンス対立無】

犬は 吠える。

（工藤 1995: 149 に例文を追加）

■ 本発表の目的

➢ 属性叙述文へ構成的(compositional)にアプローチすることによって、事象叙述文と属性叙述文の共通性をとらえる（cf. 全体論的(holistic)なアプローチ）

- テンス・アスペクトの観点から属性叙述文を整理する
- 属性叙述文のアスペクトにも、事象叙述文と共通する体系が存在することを示す

■　考察対象

表 1　ル／テイルの意味と叙述類型（cf. 金田一 1950; 藤井 1976; 工藤 1982, 1995）

	ル形	テイル形
事象叙述	太郎が明日学校を休む。**[未来]** 太郎が今部屋にいる。**[現在]**	太郎が走っている。**[動作継続]** 枝が折れている。**[結果継続]**
属性叙述	鳥は飛ぶ。**[総称]** 太郎は毎朝ジョギングをする。**[習慣]**	太郎は毎朝ジョギングをしている。**[習慣]** 太郎は何度もフランスに行っている。**[経験]**

➢　テイル形に共通するアスペクト意味を探る

2.　先行研究

■　総称文研究

➢　属性叙述文の意味に関わる要因を構成的にとらえるにあたって、文の総称性(genericity)に関わる意味論の知見を援用する

➢　述語の意味と主語名詞句の解釈の関連（Carlson 1977; Diesing 1992; Kratzer 1989/1995 他）

- 場面レベル述語（stage-level predicate; 以下 SLP）と個体レベル述語（individual-level predicate; 以下 ILP）

(4)　a.　Firemen are available.　　SLP　[存在／総称]
　　b.　Firemen are altruistic.　　ILP　[*存在／総称]
(5)　a.　子ども は／が 元気だ。　　SLP　[中立叙述／総記]
　　b.　子ども は／が 正直者だ。　ILP　[*中立叙述／総記]

- (5b)に存在解釈が与えられないことは、日本語では数量詞遊離の可否から確かめることができる（cf. Ishii 1991、鈴木 2014, 2017）

(6)　a.　子どもが 3 人元気だ。　　SLP
　　b.　*子どもが 3 人正直者だ。　ILP

3.　本発表のアプローチ

■　属性叙述文と総称性

➢　個体の総称性とテンスの総称性のいずれかを満たした文は属性叙述文となる

(7)　a.　恐竜は白亜紀に絶滅した。　（個体の総称性＋、テンスの総称性－）
　　b.　太郎は正直者だ。　　（個体の総称性－、テンスの総称性＋）

➢　本発表では、テンスの総称性の観点から属性叙述文にアプローチする

- 属性叙述文の中でも、時間軸上に位置づけることのできる存在テンスを持つもの(7a)と時間軸上に位置づけられない総称テンス(7b)を持つものが存在する
- テンス・アスペクトの各形式がテンスの総称性とどのような関連性を持つかを探る

4. 現象

4.1. 習慣相のテイル

■ ル形習慣文とテイル形習慣文

➢ (8)においては、一見「アスペクト対立が中和（工藤 1995)」しているように見えるが、ル形習慣文とテイル形習慣文では、形式の対立に応じて意味解釈のメカニズムが異なる（鈴木 2016, 2017）

(8) a. 日本人は毎日お米を食べる。
b. 日本人は毎日お米を食べている。

■ ル形習慣文とテイル形習慣文の違い

➢ ル形習慣文が ILP を用いた文と同様のふるまいを示すのに対し、テイル形習慣文は SLP を用いた文と同様のふるまいを示す

● 数量詞遊離の可否

(9) a. *日本人が 3 人毎日お米を食べる。
b. 日本人が 3 人毎日お米を食べている。

● 時間限定の副詞との共起（cf. 野田 2011）

(10) a. *子どもが昨日から正直者だ。 ILP
b. 子どもが昨日から元気だ。 SLP
(11) a. *日本人は弥生時代から毎日お米を食べる。
b. 日本人は弥生時代から毎日お米を食べている。

➢ テイル形が表している「習慣」の意味はあくまで「反復」(12)からの派生的意味であり、一度も起こったことのない事態に対しては用いられない

(12) a. 太郎はさっきからくしゃみをしている。
b. ここ一年で、次々と人が辞めている。
(13) （南極からの問い合わせがあったことは一度もない場面で）
a. 太郎は南極からの問い合わせに対処する。
b. #太郎は南極からの問い合わせに対処している。

➢ ル形習慣文が総称的なテンスと結びついているのに対し、テイル形習慣文は存在テンスと結びついており、過去に反復的な事態が生起したことを表している

● 個体とテンスの総称量化を要求する「ものだ」補文への生起（cf. 眞野 2008）

(14) a *太郎は正直なものだ。 ILP
b. *太郎は元気なものだ。 SLP
(15) a. 子どもは正直なものだ。 ILP
b. 子どもは元気なものだ。 SLP
(16) a. 日本人はお米を食べるものだ。
b. *日本人はお米を食べているものだ。

4.2. 経験相のテイル

■ 経験相のテイルとテンス

➢ 経験相のテイルが表す事態は出来事時や参照時以前には成り立っておらず、時間軸上に位置づけることが可能な存在テンスと結びついている

(17) a. 恐竜は白亜紀に絶滅している。
b. これまでに、日本人はおよそ 500 個のメダルを獲得している。

➢ 経験相のテイルも SLP と同様のふるまいを見せる

● 数量詞遊離の可否

(18) a. 日本人がシドニーオリンピックで 5 人メダルをとっている。
b. これまでに、老人がこの坂で 3 人転んでいる。

● 寿命効果(lifetime effect: Krazter 1995 他)

(19) 太郎は東京出身だった。 ILP (→太郎は死んでいる)

(20) a. 太郎は夕方までに酒を飲んでいた。(#→太郎は死んでいる)
b. 太郎は 2000 年までに予防接種を受けていた。(#→太郎は死んでいる)

➢ 「ものだ」補文へ生起できないことから、主語がたとえ総称的な例であってもテンスは総称的でないことが分かる

(21) a. *恐竜は白亜紀に絶滅しているものだ。
b. *ヒトは猿から進化しているものだ。

5. テンスの総称性と主題

■ テイルと主題

➢ 本発表の主張と対立する考察：
Sugita (2009)は、継続相（動作継続、結果継続）のテイルは SLP、経験相・習慣相のテイルは ILP との見方を示している

➢ 経験相・習慣相のテイルが ILP であれば、義務的に主題を要求することになるが、この問題を考える上では「主題」の概念を整理する必要がある

■ 経験相のテイルと「主題」

➢ 経験相のテイル文にはタ形と言い換えられるものが存在する（工藤 1982, 井上 2001）

(22) a. 太郎はすでに予防接種を受けている。
b. 太郎はすでに予防接種を受けた。

➢ 井上 (2001)で論じられているように、(22)のテイル形とタ形には、「統括主題」の有無に差がある

(23) 現代を代表する作曲家の一人である武満徹氏がさる 2 月 20 日になくなりました（??なくなっています。）今日はまず、氏の代表作の一つである「弦楽のためのレクイエム」を小澤征爾氏の指揮、トロント交響楽団の演奏でお聞きいただきたいと思います。

(24) このところ世界各国で著名人が相次いでなくなっていますが、日本では、現代を代表する作曲家の一人である武満徹氏がさる 2 月 20 日になくなっています。

（井上 2001: 114-115）

- タ形を用いた(23)は単に出来事の生起のみを述べる文であり、先行文脈の支えがない談話の冒頭でも用いることができる
- テイル形は、「過去の出来事を発話時において有効なある統括主題（複数の類似の出来事の背後にある一つの状態）に従属する一事例としてとらえる（井上 2001: 154)」

➢ (22a)も「統括主題」を要求するテイル形により、「太郎」についてのいくつかの叙述が述べられた談話の中に置かれやすい

- しかし、ここで要求されている「主題」は ILP が要求しているものとは異なる

■ 総称テンスが要求する主題

➢ 主題は存在テンスを持つ文と総称テンスを持つ文の双方に現れうるが、一文内で要求される主題であるか(25a)、談話の中で要求される主題であるか(25b)が異なる

(25) a. 太郎は正直者だ。
b. 太郎は怒った。

- 益岡（2004, 2007)の「文内主題」と「談話・テクスト主題」の区別
- ILP は前提的な主語を要求する（Diesing 1992; Kratzer 1989/1995; Milsark 1974 他）

➢ 習慣相・経験相の要求する主題は、「談話・テクスト主題」であっても「文内主題」ではない

6. まとめ

■ 本発表の主張

➢ 構成的アプローチに基づき、属性叙述文をテンスの観点から整理すると、存在テンスを持つものと総称テンスを持つものを区別することができる

➢ 属性叙述文においても形式に基づいた意味の対立は存在し、属性叙述文に現れる習慣相・経験相のテイル形も存在テンスと結びつく一貫した意味を持つ

■ 構成的アプローチの意義

➢ 属性叙述文に対する益岡の一連の研究における全体論的(holistic)なアプローチは、佐久間(1941)以来伝統的に論じられてきた属性叙述と事象叙述の対立が「文の述べ方」に関わるものであったことに基づいているが、「当該の文が何によって属性叙述となっているか」を見えにくくすることもある

- テンスの総称性という観点からアプローチすることによって、属性叙述文の意味を要素還元的にとらえることができる

➢ 影山（2009, 2012)、工藤（1995, 2012)等の先行研究が強調してきた事象叙述と属性叙述の違いに対し、属性叙述文においても事象叙述文と同様に、アスペクトとテンスの各要素から構成的に意味が計算されていることを明らかにした

- テンス・アスペクト体系の総体を属性叙述文も含めて考えることが可能になる

参考文献

Carlson, Gregory N. (1977) Reference to Kinds in English. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Diesing, Molly (1992) Indefinites. Cambridge, MA: MIT Press.

藤井正（1976)「「動詞＋ている」の意味」金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』pp.97-116，むぎ書房.

井上優（2001)「現代日本語の「タ」―主文末の「…タ」の意味について－」つくば言語文化フォーラム『「た」の言語学』pp. 97-163，ひつじ書房

Ishii, Yasuo (1991) Operators and Empty Categories in Japanese. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.

影山太郎（2009)「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136, pp.1-34.

影山太郎（2012)「属性叙述文の文法的意義」影山太郎(編)『属性叙述の世界』pp.3-35，くろしお出版.

Kratzer, Angelika (1989) Stage and individual level predicates. Ms. University of Massachusetts.

Kratzer, Angelika (1995) Stage and individual level predicates. In Gregory N. Carlson and Francis Jeffry Pelletier (eds.) The Generic Book, pp.125-175, Chicago: University of Chicago Press.

工藤真由美（1982)「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13(9), pp.51-88.

工藤真由美（1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト：現代日本語の時間の表現』ひつじ書房.

工藤真由美（2012)「時間的限定性という観点が提起するもの」影山太郎(編)『属性叙述の世界』pp.91-109，くろしお出版.

眞野美穂（2008)「状態述語文の時間性叙述の類型」益岡隆志(編)『叙述類型論』pp.67-91，くろしお出版.

益岡隆志（1987)『命題の文法―日本語文法序説』くろしお出版.

益岡隆志（2004)「日本語の主題―叙述の類型の観点から―」益岡隆志(編)『主題の対照』pp.3-17，くろしお出版.

益岡隆志（2007)『日本語モダリティ探究』くろしお出版.

益岡隆志（2008)「叙述類型論に向けて」益岡隆志(編)『叙述類型論』pp.3-18，くろしお出版.

Milsark, Gary L. (1974) Existential Sentences in English. Ph.D. dissertation, MIT.

野田高弘（2011)「現代日本語の習慣相と一時性」『東京大学言語学論叢』31, pp.197-212，東京大学.

佐久間鼎（1941)『日本語の特質』育英書院. [1995 復刊 くろしお出版.]

Sugita, Mamori (2009) Japanese –te iru and –te aru: The aspectual implications of the stage-level and individual-level distinction. Ph.D. dissertation, The City University of New York.

鈴木彩香（2014)「ガ格の総記／中立叙述用法と 裸名詞句の総称／存在解釈の統一的説明」『言語学論叢』オンライン版 7 号(通巻 33 号), pp.36-50，筑波大学一般・応用言語学研究室.

鈴木彩香（2016)「習慣文のアスペクト形式と意味解釈―単純ル形とテイル形の対立を中心に―」『日本語と日本文学』60, pp.1-14，筑波大学日本語・日本文学会.

鈴木彩香（2017)「属性叙述文の統語的・意味的分析」博士論文，筑波大学.